高等学校の制服変更に関する事例的考察

静岡県立横須賀高等学校　山　崎　保　寿

1．はじめに

最近、街で見かける高校生の制服が大きく変わりつつある。従来の詰襟、セーラー服型の制服に代わって、ブレザー型の制服が多く見られるようになっている。都会の私立高校に始まったブレザー型の制服が、地方公立高校でも多く見られるようになってきている。高等学校の制服変更は、今や全国的な波になっているのである。

制服変更は、学校経営的にも大きな意味をもっている。なぜならば、新しい制服によって、生徒がその学校に通うことに魅力を感じ、学校に対する誇りを高めることができるならば、実際の学校経営に大きな効果があるからである。

海外においても、政府が学校経営の自由競争を積極的に奨励しているイギリスでは、学校の魅力を高めるために制服に関する規則が一段と厳しくなっているとの報告がある[1]。これは、イギリスでは、学校の制服は長い伝統をもち、制服のある学校は教育水準が高く規律正しいよい学校であるという認識があるためであるという。

このように、内外を問わず、制服変更は学校経営的に大きな意味を持っている。と同時に、制服変更にはスクール・アイデンティティーに関する生徒と教員との意識の違いの問題、新しい制服の運動性や機能性に関する問題等、幾つかの課題も指摘しなければならない。制服変更の全国的な動きが見られる今日、それらの課題を明らかにすることが必要になっている。

本稿では、平成４年度に制服を変更したＳ県立Ｙ高等学校[2]を事例として、制服変更に関する学校経営的課題について、生徒と教員との意識の違いの問題を中心に考察することにする。

2．制服変更に関する全国的動向と先行研究の概観

日本毛織（本社大阪）の調べによれば、平成４年度に制服を変更した高等学校は、実に、全国で336校であり、平成２年度から平成４年度までの３年間では、総計872校に達している[3]（表１参照）。

表1．最近3年間に制服を変更した高校数

年　度	公立高校	私立高校	計
平成2年度	147	99	246
平成3年度	97	193	290
平成4年度	238	98	336
合　　計	578	294	872

（日本毛織の調査から作成）

これほど多数の高等学校が競うようにして制服を変更していながら、制服変更の学校経営的な意義については、あまり調査・報告がなされていないようである。最近の制服変更の動向が全国的であるのに対して、制服に関する研究は極めて少ないといえる[4]。

制服変更が学校経営に及ぼす効果に関する研究は乏しいが、学校の制服一般に関する最近の研究としては、教育学部生の制服に関する態度を教育心理学的に調査した田村・尾崎（1990）による研究、そして、最近の制服変更の動向を被服衛生学の観点から考察した田口・芳賀（1990）による研究がある。

まず、高知大学の田村和子・尾崎由里子は、教育学部生の制服に対する態度を調査し、4つの因子を抽出している[5]。すなわち、「ファッション感覚阻害」の因子、「学生管理」の因子、「経済的平等」の因子、「保健衛生機能」の因子の4因子である。これは、詰め襟・セーラー服を中心とした旧来の制服が、ファッション感覚の阻害、学生管理、経済的平等、保健衛生機能の象徴として捉えられているのに対し、新しい制服はまさにその対極としての性格、つまり、最近のファッション感覚に合っており、管理よりも自由さを感じさせるものであり、素材やデザインの点でも優れていると考えられているというものである。

次いで、福島大学の田口秀子・芳賀由子は、最近、全国的規模で制服を変更する高等学校が急増している要因には次の5つがあると述べている[6]。

（1）生活文化体系の変化にともない社会環境が大きく変わったこと。

（2）生活が豊かになって被服製品に対する要求度がこれまでより高くなり、ファッション性が高く、機能的でかつ健康的な、付加価値の高い性能の被服を求めるようになったこと。

（3）若者を対象とした数多くの雑誌、生活用品のファッション化傾向や、これら情報のスピード化等によって高校生の生活に対する意識が大きく変わったこと。

（4）その一方で、高校生が制服を故意に補正している現状から見て、校則違反に対する服装指導としての意味をもっていること。

（5）さらに、数年後に激減する高校生の実態を未据えて、魅力ある学校のシンボルとして、制服改定の実施をせざるを得ない実情があること。

田口・芳賀は、このような制服変更の実情を踏まえ、さらに、被服衛生学の面から見ても、現在は学校におけるこれまでの制服の見直しがなされていなければならない時期にあると指摘している。

以上のように、制服に関するこれまでの研究は、制服の機能の変化に関する考察や制服変更の要因に関する考察が主であり、制服の変更が学校経営にどのようなメリットをもたらしたか、あるいは学校への評価がどのように変ったかといった考察は少ない。

3．事例校における制服変更の目的と経過

事例校では、平成4年度1年生から学年進行で従来の詰め襟・セラー服型の制服からブレザー型の制服に変更することになった。制服を変更した理由は、それまでの制服には、男子生徒は学生服を短くしたりズボンを太くするなど、女子生徒はスカートを長くするなど、変形学生服の着用や改造が行われていたこと。教員の間に、服装の乱れは生活の乱れという考えがあり、生徒の服装を正すことが生活状況の向上につながるという生徒指導観があったこと。当時、事例校では生徒の問題行動が多く発生し、地域における学校のイメージが低下していた状態であり、新しい制服によって学校のイメージをアップしたいという意図があったことなどである。

事例校の学校新聞は、新しい制服には次の4つの願いが込められていると述べている[7]。（1）上品であること、（2）個性が表現できること。（3）現代的・全国的感覚にマッチすること、（4）学校のオリジナルティーがあることである。これらの願いは、ともすれば無気力になりがちな生徒の誇りと士気を高め、生徒の学校生活に活力を与えようとする当時の教員の気持ちを物語っている。

新しい制服への変更に当たっては、事例校の教員で構成される制服検討委員会が中心になって進められた。制服検討委員会の構成メンバーは、教頭、生徒指導主事、学年主任、生徒指導部教員、家庭科教員など8名である。家庭科教員が含まれているのは、被服的観点から制服の材質やデザインを検討するためである。

制服検討委員会は、月1回程度開かれ、新しい制服の形態や制服変更に関する手続きを検討した。また、生徒会と連携して生徒対象に、制服変更に対する賛否やどのような制服を望むかについてアンケート調査を実施した。制服が決定されるまでには、ブレザーの形や色に関して複数の試作品が作製され、それを生徒集会で代表生徒に試着させて生徒の希望を取り入れた。

このような検討を経て決定された新しい制服の最大の特徴は、生徒が自分で組み合わせを考えて個性を表現できることである。例えば、男子の場合はワイシャツとポロシャツの選択が可能であり、ポロシャツの採用はS県で2校目である。女子の場合は、プリーツスカートとキュロットスカートの選択が可能であり、ブラウスについても3色の中から好きな色を自由に選べるようになっている。これは全国的にも新しい方式である。

このように、事例校では、斬新な方式で、しかも高校生が自信と誇りをもてる制服が模索され、制服変更を契機として生徒の意識を学校生活に前向きなものへと変えようとしたのである。

4．新制服に関するアンケート（生徒と教員の意識）

事例校では、制服変更後の平成4年6月に、生徒および教員を対象として新制服に関するアンケート調査を実施した[8]。ここでは、新しい制服に対して生徒と教員との間にどのような意識の違いがあるかという問題に関して、この調査の4つの項目を分析することによって明らかにしたい。

分析の手順は、新制服に関して生徒と教員の回答数の比に差があるかどうかについて、クロス表の数値に対してχ^2検定を施し、有意性（＊$p<0.05$, ＊＊$p<0.01$）が見られた場合にはさらに残差分析を実施し、結果の解釈を行った[9]。

（1）新しい制服の印象について

表2は、生徒と教員について新しい制服の印象に差があるかどうかを質問したものである。χ^2検定の結果、生徒の人数と教員の人数との違いは有意であった。（$\chi^2(3)=9.622$, $p<0.05$）。そこで、残差分析を行った結果、新しい制服が「ありふれている」と答えた生徒の数が教員の数よりも有意（$p<0.01$）に上回った。新しい制服は、生徒にとっては教員が感じる以上に「ありふれている」という印象が強いものであったといえる。表2に示されてはいないが、「ありふれている」と答えた生徒には2・3年生が多く、旧制服への愛着がこうした結果になったものと考えられる。

この結果は、学校運営に直接参加している教員の方が、生徒以上に新制服に対する思い入れが強いことを表していると考えられる。つまり、新しい制服によって、学校生活を明るく、楽しく、真面目で、ありふれたものでない個性的なものにしたいという教員の強い願いが反映された結果であると考えられる。

表2．新しい制服の印象

生徒・教員クロス表	生　徒	教　員	残　差	有意性
1．都会的な印象を受ける	63	18	-1.405	n．s．
2．知的な印象を受ける	20	4	0.112	n．s．
3．生徒が真面目に見える	33	12	-1.814	＋
4．ありふれている	68	5	2.918	＊＊
χ^2検定	$\chi^2(3)=9.662$＊		残差分析	

（+$p<0.10$, ＊$p<0.05$, ＊＊$p<0.01$）

（2）学校の印象について

表3は、制服の変更によって学校の印象が変わったかどうかを質問したものである。χ^2検定の結果、生徒の人数と教員の人数との違いは有意であった（χ^2（3）＝16.873，p＜0.01）。そこで、残差分析を行った結果、第一に、学校の印象が「明るくなった」と答えた生徒の数が教員の数よりも有意（p＜0.05）に下回った。したがって、学校の印象は、教員が「明るくなった」と感じるほどには生徒の多数は「明るくなった」とは感じていないといえる。

第二に、第一の結果と同様に、学校の印象が「自由な雰囲気になった」と答えた生徒の数が教員の数よりも有意（p＜0.05）に下回った。したがって、学校の印象は、教員が感じるほどには生徒は「自由な雰囲気になった」とは感じていないといえる。

第三に、第一、第二の結果と表裏であるが、「制服が変っても、学校の印象は変わらない」と答えた生徒の数が教員の数よりも有意（p＜0.01）に上回った。しがたって、制服が変わったことによって学校の印象が、「変わらない」と感じる教員の人数の割合が少ないのに対し、生徒の多くは学校の印象は「変わらない」と感じているといえる。

これら第一、第二、第三の結果を合わせれば、制服が変わったことによって、教員の多数が、学校の印象が明るく自由な雰囲気に変わったと考えているのに比して、生徒の多くは「学校の印象は変わらない」と考えていることがわかる。

この結果は表2の場合と同様に、学校運営に直接参加している教員の方が、生徒以上に新制服に対する思い入れが強いことを表していると考えられる。つまり、新しい制服によって、学校生活を明るく自由な雰囲気にしたいという教員の強い願いが反映されたものである。

表3．学校の印象が変ったか

生徒・教員クロス表	生　徒	教　員	残　差	有意性
1．学校が明るくなった	41	15	-2.457	＊
2．学校が自由な雰囲気になった	38	13	-2.036	＊
3．学校がグレードアップした様に感じる	18	5	-0.772	n．s．
4．制服が変わっても、学校の印象は変らない	122	9	4.070	＊
χ^2検定	χ^2（3）＝16.873**		残差分析	

（+p＜0.10,*p＜0.05,**p＜0.01）

（3）制服の組み合せ方式について

表4は、新制服の第一特徴である「その日の気分で組み合せて着る方法」をどう思うかを質問したものである。χ^2検定の結果、生徒の人数と教員の人数との違いは有意であった。（χ^2（2）

＝6.041，p＜0.05)。そこで、残差分析を行った結果、「素晴らしいアイディアである」と感じている生徒は、実数では123名と多数を占めているが、その人数の割合は、教員が「素晴らしいアイディアである」と感じている割合ほどには多くないといえる。

表４．制服の組み合わせ方式に対する印象

生徒・教員クロス表	生　徒	教　員	残　差	有意性
１．従来にない新しいアイディアである	123	33	-2.445	＊
２．学校に行くのが楽しくなる	29	2	1.754	＋
３．組み合せ方式には反対である	18	1	1.471	ｎ．ｓ．
χ^2検定	χ^2（２）＝6.041*		残差分析	

(+p＜0.10,*p＜0.05,**p＜0.01)

（４）本校入学希望者が増えるか

表５は、制服が変わって本校入学者が増えると思うかどうかを聞いたものである。χ^2検定の結果、生徒の人数と教員の人数との違いは有意であった（χ^2（２）＝8.426，p＜0.05)。そこで、残差分析を行った結果、「思う」と答えた生徒の数が教員の数よりも有意（p＜0.01）に下回った。

したがって、制服が変わったことによって、生徒が感じるより多くの割合で教員の方が、本校入学希望者が増えると思っているといえる。

表５．制服の変更によって本校入学希望者が増えると思うか

生徒・教員クロス表	生　徒	教　員	残　差	有意性
１．思う	34	14	-2.869	**
２．思わない	74	12	0.497	ｎ．ｓ．
３．わからない	120	16	1.731	＋
χ^2検定	χ^2（２）＝8.426*		残差分析	

(+p＜0.10,*p＜0.05,**p＜0.01)

５．制服変更に関する学校経営的効果

以上の分析を踏まえ、事例校における制服変更による学校経営的効果があったかどうかについて５つの視点から考察することにする。まず、制服の変更が学校経営に及ぼす効果には、およそ

次の５つの点が考えられる。

（１）従来の没個性的な学生服とは違った、新しいタイプの制服に変更することによって、学校の特色を表現し、学校の魅力を高めることができる。それによって、生徒のスクール・アイデンティティーを高めることができる。

（２）新しいタイプの制服を採用する過程で、生徒の意見を聴取することができ、学校生活に対する生徒の参加意識を高めることができる。

（３）単に生徒の管理・統一のための制服といった観念から脱却して、制服の機能性・運動性を高め、制服に対するファッション感覚を満足させることができる。

（４）その学校独自の制服に変更することによって、生徒が故意に制服を改造したり、変形ズボンをはいたりといった生徒指導上の問題を大幅に軽減することができる。

（５）以上の総合的な効果によって、その学校に本当に入学したい生徒を集めることができる。

まず、第１の点については、大部分の教員が新しい制服が十分に学校の特色を表現していると考えているのに対して、少数の生徒のみが、新しい制服が学校の特色を表現していると考えており、「ありふれている」と思っている生徒の割合が教員よりずっと多いという結果である。そして、「学校がグレードアップしたように感じる」と「学校の印象は変わらない」の回答数の割合から、教員、生徒の順でスクールアイデンティティーが高まったと考えていることがわかる。

したがって、制服の変更が学校の魅力を高めるという考えについては、生徒と教員の意識の差は大きいといえる。生徒の過半数が「学校の印象は変わらない」と答えたことには、予想外の結果と感じた教員も多いと思われる。制服変更によって生徒のスクール・アイデンティティーを高めるためには、変更の過程から変更後まで、教員と生徒の双方が一体となった様々な形の働きかけが一層必要であるといえよう。

第２の点については、事例校では、生徒会が制服変更の前年に新しい制服のモデルを発表し、生徒の意見を聴取してはいるのだが、アンケートの結果に見る限り生徒の参加意識という点では十分な効果を得るには至らなかったといえる。

第３の点については、ポロシャツ、キュロットスカートなどの採用によって衣服の構造的には確かに制服の運動性・機能性は高まっている。しかし、制服のファッション性については教員と生徒とで意識の差が大きいといえる。つまり、教員は生徒のファッション感覚が満足されていると考えているが、生徒は教員が考えているほどにはファッション感覚が満たされているとは思っていないのである。事例校では、生徒は制服の組み合わせ方式にはある程度のアイディアを認めているのだが、学校が明るく自由になったとは生徒はあまり感じていないといえる。

第４の点については、新しい制服に変わってから、制服改造に関する生徒指導上の問題が実際に極めて少ないことから、その点では十分に評価できるものである。

第５の点については、制服の変更によって、本校入学希望者が増えると思っている教員が約３分の１を占めており、事例校の教員の間では、制服の変更が一応の評価を受けていると考えられ

ている。

6．おわりに

制服変更の全国的な波の中で、事例校でも新しい制服に変更することを踏み切り、平成5年度で新制服採用2年目を迎えた。故意に改造した学生服を着用する生徒が見られた以前に比べ、服装に関する生徒指導上の問題は皆無に近くなり、生徒の学校生活は、はるかに落ち着いたものになってきた。制服改造に関する問題が消滅したばかりでなく、問題行動の減少、年間退学者の半減、落ち着いた授業の成立、部活動への前向きな取り組みなど、総合的に見ると、事例校の生徒の学校生活は確かに好転してきているといえる。

以上の考察を総括すれば、制服の変更は、確かに学校に新しい活力をもたらす契機となり得るといえる。ただ、制服変更による学校改善への期待には、ともすれば教員の思い入れの方が強いことにも注意を喚起しなければならない。事例校に限らず、新しい制服を採用することによって、生徒のファッション感覚を満足させ、制服としての機能性・運動性が高まれば事たれりとする一面も見られるのである。

制服を変更する場合には、それを契機として学校をどう活性化していくかという議論が十分になされる必要があり、変更後のアフターケアへの配慮が必要不可欠である。

（注）

（1）黒田則博「海外の教育情報　制服を巡る論議」『月刊高校教育』1992年，10月号，144頁。

（2）事例校は、昭和23年創立、全日制普通科21学級、生徒数804人、平成4年3月卒業生の大学・短大進学希望率は12.3％である。

（3）日本毛織調査「過去5年間の全国モデルチェンジ校」1992による。

（4）学校の制服に関しては、被服学や教育史の立場から、

①生田則子・佐藤博子「制服に関する研究第4報」『山口大学教育学部研究論叢第2部自然科学』№24，1974年，29～38頁。

②生田則子・佐藤博子「制服に関する研究第5報」『山口大学教育学部研究論叢第2部自然科学』№24，1974年，39～46頁。

③佐藤秀夫「学校における制服の成立史」日本の教育史学第19巻，1976年，4頁～24頁．などがあり、本稿に関連するものとしては、後掲（5）（6）などがある。

（5）田村和子・尾崎由里子「学校の制服に対する教育専攻学生の態度」『高知大学教育学部研究報告第2部』№42，1990年，69頁～72頁。

（6）田口秀子・芳賀由子「高校生の制服に関する意識調査」『福島大学教育実践研究紀要』№18，1990年，99頁。

（7）「平成4年度制服全面改定」『Y高新聞』平成3年12月21日発行　参照。

（8）このアンケートでは、制服の機能などに関する10項目の質問をしており、生徒と一般住民との意識の差についても分析を施している。

（9）χ^2検定の制約については、5以下の度数がある場合には近似が悪くなるといわれている（田中　敏・山際勇一郎『ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法』教育出版1989年，265頁参照）が、その場合の検定結果の解釈に当たっては、クロス表を総合的に検討したうえで、出来るだけ妥当な解釈を行うようにした。